

SETAGAYA PUBLIC THEATRE

2015

年度

シーズンラインアップ

世田谷パブリックシアター

芸術監督・野村萬斎が語る

世田谷パブリックシアターのすべて

世田谷パブリックシアター
SETAGAYA PUBLIC THEATRE

野村萬斎

芸術監督



混迷する現代人を支えるのは「劇場」が発信する多様な創作と価値観

ラインアップを貫く劇場の「カラー」

世田谷パブリックシアターとシアタートラム、二つの劇場の新たなシーズンが始まります。この劇場を自身のホームのように捉え、コンスタントに創作の場としてくださるアーティストとの創作、若手の登竜門的な公演、新たなアーティストとの出会い、区民を中心に劇場を支えてくださる多くの方々との交流企画など、今年もバラエティ豊かで創作性に富んだプログラムを用意することができました。劇場のスタートは1997年。そろそろ20周年も視野に入りはじめた今年のラインアップ

は、この劇場がこれまで多くの創作、作品を通して表明・蓄積してきた劇場としての個性、いわば「カラー」を象徴するもの、と言えるのではないのでしょうか。では、18年の間に二つの劇場が身にまとうてきた「カラー」とは、どういったものなのか。たとえば昨年は、文学座の上村聡史さんを演出に招いた『炎 アンサンディ』という翻訳劇を多くの方に評価していただきました。あるいは劇場を代表する企画である「現代能楽集」。古典の題材を現代のつくり手と出会わせ、創作の中でその普遍性と現代に上演する意義を問い直す、このシリーズから生まれた『奇ッ怪 其ノ弐』(前川知大 作・演

出)のような、劇場のオリジナル作品が広く耳目を集めた年もあります。さらには同じ古典を題材にした私自身の構成・演出作『マクベス』(2010年初演)を、一昨年、昨年と続けて国内外各地で上演することができ、多くの方々に見ていただく機会を得たという成果もありました。一方で今年10月に久々に新作で登場するロベール・ルパージュや、『エレファント・パニッシュ』『春琴』で共同創作を重ねたサイモン・マクバーニー、振付家ジョセフ・ナジなど、海外のアーティストとの継続的な創作、上演も、その完成度において常に好評をいただいております。

出会い・気づき・助け合う 多くの人を幸福にできる場所が劇場

このように並べていくと見えてくるのは、この劇場の「カラー」が決して一つの色ではないということ。そもそも同一劇場の発信でありながら作品の傾向、ともに組むアーティストの志向、企画がめざすもの、ご覧いただく観客の年齢や性別などまで、公演ごとに違っても過言ではありませんし、古典に基づく王道的な作品もあれば、時代に即した、あるいは先んじた実験的・先鋭的な公演もある。そんな多種多様な作品群を大らかに受け入れ、揺らぐことなく観客に提供し続ける懐の深さ、土台の確かさがこの二劇場の特徴であり、それを踏まえた創作の多彩さが、劇場を見る角度によって変わるタマムシの体色のような色彩で染め、結果それが劇場の「カラー」となっている。芸術監督として、私はそんなふうに考えているのです。2015年度はそんな、劇場の蓄積を多面的な「カラー」として表出する作品群をお届けできると自負しています。

考えるべき価値ある題材を多くの人に手渡すために

古典芸能と現代劇、東洋と西洋。一見、相反するベースを持つ題材、人材、センスなどをマッチングし、そこに生まれる反発や融合など、さまざまな化学反応を創作に取り込み、一方だけでは成しえなかった豊かな表現を作品とし、観客に提供する。これは、私が芸術監督になった当初から掲げてきた指針です。結果、当劇場が創作の上でも、足を運んでくださる観客においても、幅広い多様性を獲得していったことは必然と言えるでしょう。とはいえ、個々の作品が万人向けかと言えば、それは違うかもしれません。表現の世界ですら、これほどまでに多様化、細分化が進んだ現代社会において、「万人向けの作品」をつくることなど、もはや不可能に近いことではないでしょうか。

ただ、提示する作品が一定のクオリティを持ち、提供する劇場に確固たる指針があれば、作品はジャンルや世代を越えて、より多くの観客に訴求する。それは私自身が、この劇場で多くの創作と観客に向き合うなかで得た実感です。もちろん「クオリティ」のなかには、芸術性や問題意識、現代に上演する意義といった高次のことだけでなく、エンターテインメントと呼ぶにふさわしい面白さまでが含まれているべきだと思います。作家である故井上ひさしさんが遺した言葉に、「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをゆかいに、ゆかいなことをまじめに」というものがあります。これは非常な名言で、つくり手も観客もともに考えるべきものを内包する確かな題材を選び、それをいかに多くの人に届く作品にしていけるか、その思考の過程が凝縮された言葉だと私は思いました。先に挙げた『現代能楽集』や、演劇として

の狂言その普遍性と現代性を検証する『狂言劇場』などをはじめ、世田谷パブリックシアターとシアタートラムの作品も、先の言葉が示す高い志のもとに創作されている、と常に胸を張って言えなければならない。だからこそ、新たにこの劇場と出会うアーティストたちも、この場で何をつくるべきか、今までの自身の創作を振り返りながら見つめ直す機会にもなるはず。実際、他所でも活躍されている複数のアーティストから「この劇場で創作するにはいつも、社会性の高い、鋭い視座を持つ作品を選びたい」というような、ありがたい言葉もいただいています。これもまた、劇場の一つの「カラー」と言えるのではないのでしょうか。



2010,13,14『マクベス』

客の区別なく関わる方すべてに、なんらか持ち帰っていただけるものがあるべきだ、と私は考えています。それは私にも、劇場のスタッフたちにとっても高いハードルですが、そのハードルがあったからこそ、今のこの二つの劇場に対する認知がある。指針は、今後変わることはありません。

演劇を「人生」に活用する普及啓発・人材養成事業

もうひとつ、各種のワークショップを中心とした普及啓発・人材養成プログラムの数の多さ、充実度の高さもこの劇場の特色として挙げたいと思います。劇場が立地する世田谷区が、アウトリーチ活動に関心の高い方々を多く擁していることもあり、学校や高齢者施設を巡回する演劇プログラム、区民の方々にご参加いただく企画ともども、長く好評をいただけてきました。子どもたちなど若年層に限らず、新たな観客の発掘と育成はこの国の演劇、舞台芸術

界に近い者にとっては現在も最重要課題のひとつですが、それだけでなく、昨今の荒廃した社会状況を改善するためにも、これら普及啓発・人材養成プログラムが有効だと私は考えています。今の日本は、下向きの経済状況が問題視されつつも、戦時下にあるような諸外国に比べれば、日々の暮らしにいきなり窮することのない層が多いとされています。にも関わらず、近親者間での傷害や殺人の増加、暴力事件の低年齢化など、深刻な現象が日々報道されています。「生活することがすべて」ではない日本で、何故このような事態が起こっているのか。私には、経済や物質的な充実を追うあまり、精神的な豊かさをないがしろにしたことに原因があるのではないかと思えてなりません。この国は今、「生きるため」よりも「死なないため」の糧や方法を探しながら、多くの人が迷走している。そんな混迷する人と時代にとって、演劇や劇場の果たしうる貢献は非常に大きいと私は考えています。

劇場に足を運び、種々の創作を目にするという行為は、あらゆる角度から自身と他者の「生」を考えることになる。鬱屈した自身の感情を役や物語に託し、昇華させることもできる。舞台上の出来事を受け取り、想像を広げることから、目の前の窮屈な現実にとりつかれた生活から自由になる術も得られる。さらに踏み込み、先述のワークショップなど創作に能動的に参加し、自ら体験・体感したならば、身近なところにも異なる価値観が無数にあることに気づき、それまでとは違う観点から自身と、周囲の人々が「生きること」を肯定できるようになる。疲弊した人と社会にとって、これほど有効なことは他にはないように思います。人間には当たり前に得手不得手があり、それが各人の個性にもなっている。多様な人々の中で、いかに自身のアイデンティティを確立し、社会とどう向き合い、参加するか。社会に参加する一員としての自身に、自分どのような価値を見出すことができるか。ただ日々を労働に費やし、衣食住といった生活の

新年度の所信を託す『敦 一山月記・名人伝一』

今シーズン、最初に私が中心として関わる公演は6月の『敦 一山月記・名人伝一』で、芸術監督に就任後ほどなくしてつくった05年初演の作品です。20世紀前半、病を抱えながらも文学を通して人間とは、生死とは、己自身とは何かを問い続け、若くして世を去った作家・中島敦の短編をもとにした舞台は、先にお話しした生きるために必要なもの、その「答え」を見つけ出すためのヒントに満ちており、多くの人が自身を探しあぐねる今、上演するには最適の作品だと考えています。時代を取り込みつつ進化&深化し、普遍性を獲得していく。そんな、劇場を象徴するような今作に、新年度の所信表明と、ラインアップ作品へのエールを託し、演じたいと思っています。



2011現代能楽集VI『奇ッ怪 其ノ弐』



2008.09.10.13世田谷パブリックシアター・イコンシアター共同制作『春琴』

基本要素だけに汲々せず、世界に向かって開かれた自分であるためには何が必要か。それらの問いに対する答えが、劇場と、そこから発信されるあらゆるもののなかにあると私は考えています。あるいは、それらの「答え」を持っている劇場こそが私の理想である、と言い換えてもいい。前述のように得手不得手のある人間が集まり、創作ごとに一人の人間の発想を、多くの別の才能を持つ人が助け、盛り立て、一つの作品へと結晶させることが劇場の日常です。私自身、ここで多くの助けを得て、自身の理想・夢を実現させてもらっている幸福な人間の一人ですが、同じような幸福を得るチャンスが、ここ三軒茶屋にある二つの劇場に関わる人なら誰にも等しくあるのです。そのチャンスを、世田谷区民のみなさんを筆頭に、もっともっと多くの方に手にしていただきたい。それが今の私の大きな願いです。

新年度の所信を託す『敦 一山月記・名人伝一』

今シーズン、最初に私が中心として関わる公演は6月の『敦 一山月記・名人伝一』で、芸術監督に就任後ほどなくしてつくった05年初演の作品です。20世紀前半、病を抱えながらも文学を通して人間とは、生死とは、己自身とは何かを問い続け、若くして世を去った作家・中島敦の短編をもとにした舞台は、先にお話しした生きるために必要なもの、その「答え」を見つけ出すためのヒントに満ちており、多くの人が自身を探しあぐねる今、上演するには最適の作品だと考えています。時代を取り込みつつ進化&深化し、普遍性を獲得していく。そんな、劇場を象徴するような今作に、新年度の所信表明と、ラインアップ作品へのエールを託し、演じたいと思っています。

野村 萬斎 のむら まんさい

1966年、東京都生まれ。狂言師。人間国宝・野村万作の長男。重要無形文化財総合指定者。2002年より世田谷パブリックシアター芸術監督を務める。国内外の能・狂言公演や舞台・映画出演はもとより、世田谷パブリックシアターではまちがいの狂言など狂言の技法を駆使した舞台や、『国盗人』など古典芸能と現代劇の融合を図った舞台を次々と手掛ける。芸術監督就任後初の構成・演出作『敦 一山月記・名人伝一』では朝日舞台芸術賞、紀伊國屋演劇賞を受賞。構成・演出・主演を務めた『マクベス』は全国各地で上演を重ねるほか、海外公演(ソウル、ニューヨーク、シビウ、パリ)も果たした。

2015

4

4月29日[水・祝]～5月6日[水・休] 世田谷パブリックシアター
シアタートラム
世田谷区民と劇場が
ともに作りあげるステージ

『フリーステージ2015』

6

6月13日[土]～6月21日[日] 世田谷パブリックシアター

野村萬斎が描く中島敦の世界——
初演から10年の時を経て、
待望の再演決定！

『敦一山月記・名人伝—』

原作＝中島敦 構成・演出＝野村萬斎
出演＝野村万作／野村萬斎／石田幸雄／深田博治／高野和憲／月崎晴夫
大鼓＝亀井広忠 尺八＝藤原道山 チケット発売＝4月19日[日]

© 藤山純博

7

7月15日[水]～8月2日[日] 世田谷パブリックシアター

“愛”と“戦争”を描いたシェイクスピアの問題作に、
鶴山仁と豪華キャスト陣が挑む
世田谷パブリックシアター＋文学座＋
兵庫県立芸術文化センター

『トロイラスとクレシダ』

作＝ウィリアム・シェイクスピア 翻訳＝小田島雄志
演出＝鶴山仁
出演＝浦井健治／ソニン／岡本健一／渡辺徹／
今井朋彦／横田栄司／吉田栄作／江守徹 ほか
チケット発売＝5月16日[土]

© 細野晋司

せたがやこどもプロジェクト2015

夏休み。遊びたい。どこいこう？！ 家族そろって世田谷パブリックシアター、
シアタートラムへ出かけよう!!

ステージ編

7月 シアタートラム

当劇場でおなじみのアーティストによる、
絵本の読み聞かせ
子どもとおとなのための◎読み聞かせ

『お話の森』

出演＝仲村トオル／ROLLY／小林顕作



8

8月 シアタートラム

気鋭の演出家と子どもたちによる、
新感覚のおとぎ話
『こどもたちとつくる演劇公演』

構成・演出・振付＝スズキ拓朗



8月 世田谷パブリックシアター

日野皓正と世田谷区立中学生の
ジャズビッグバンドによる
大迫力のコンサート『日野皓正 presents
“Jazz for Kids”』

出演＝日野皓正／Dream Jazz Band ほか



© 牧野朝亮

8月 シアタートラム

こどもたちにおくる、とっておきの音楽と物語
『SMA for キッズ 音楽とお話』(仮)

ワークショップ編

小学生／中学生／高校生のための演劇・ダンスWSを各種開催



9

9月 世田谷パブリックシアター

毎回多彩なゲストを招き、
「表現の本質」を探る芸術監督企画『MANSAI◎解体新書
その貳拾伍』

出演＝野村萬斎 ほか



10

10月 シアタートラム

先人の劇作家の作品を読む
シリーズ企画。今年はカミュ第二弾『戯曲リーディング◆
時代を築いた作家たち③』

演出＝中屋敷法仁



10月 世田谷パブリックシアター

世界屈指の先鋭的アーティストの名作が、
刺激的な進化を遂げて甦る『ロベール・ルパージュ
作・演出 新作公演』

© Sophie Grégoire

10月17日[土]・18日[日] キャロットタワー周辺

三軒茶屋の街が、ちょっと風変わりな
「アートタウン」に変貌する2日間

世田谷アートタウン2015

『三茶 de 大道芸』

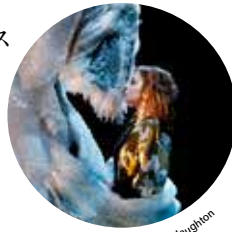


10月 世田谷パブリックシアター

壁の向こうはラビリンス。
チャップリン一家のロマンチックサーカス
が初来日

世田谷アートタウン2015 関連企画

『ミュルミュル ミュール』

構成・演出＝ヴィクトリア・ティエレ＝チャップリン
出演＝オーレリア・ティエレ ほか

© R. Haughton

11月 世田谷パブリックシアター

古典の知恵と洗練を
現代に還元するシリーズ企画、
マキノゾミが初登場

『マキノゾミ 作・演出 現代能楽集Ⅷ』

企画・監修＝野村萬斎



2月 シアタートラム

赤堀雅秋による現代社会を鋭く抉る新作が、
シアタートラムに放たれる

『赤堀雅秋 作・演出 新作公演』



2月 世田谷パブリックシアター

開館以来の恒例企画
今年も豪華な顔ぶれに期待

『爆笑寄席●てやん亭』

2月 世田谷パブリックシアター

国内外で活躍する
日韓のアーティストによる、
新時代のコラボレーション

白井剛×キム・ソンヨン『原色衝動』

振付・出演＝白井剛／キム・ソンヨン 写真映像＝荒木経惟



2月 シアタートラム

世田谷パブリックシアターが
期待を寄せる新しい才能シアタートラム ネクスト・ジェネレーション vol.8
第4回世田谷区芸術アワード“飛翔”受賞者公演

開幕ペナントレース



3月 シアタートラム

地域の多世代にわたる
参加者たちが紡ぐ物語の発表会

『地域の物語2016』



コミュニティプログラム

- ▶ 演劇・ダンスワークショップ
- ▶ 子どものためのワークショップ
小学生・中高生のための
演劇・ダンスワークショップ
世田谷パブリックシアター演劇部
中学生の部
- ▶ 地域の物語ワークショップ

学校・施設との連携プログラム

- ▶ 学校のためのワークショップ
かなりゴキゲンなワークショップ巡回団
先生のための演劇ワークショップ
- ▶ 世田谷区立中学校演劇部支援
- ▶ 区内施設連携プログラム

移動劇場

- 世田谷パブリックシアター@ホーム公演
世田谷区内の高齢者施設ほかで上演
『チャチャチャのチャリー』新作
脚本・演出＝ノゾエ征爾

研究育成プログラム

- ▶ 観客育成プログラム
世田谷パブリックシアター＋ITI (国際演劇協会)
レクチャー
舞台芸術のクリティック
世田谷パブリックシアター ダンス食堂
- ▶ 専門家育成プログラム
進行役のための世田谷ワークショップラボ
演劇研究ゼミナール
舞台技術講座

世田谷パブリックシアター/
シアタートラム

チケット購入のご案内

世田谷パブリックシアター

チケットセンター

キャロットタワー 5階

Tel. 03-5432-1515

電話・店頭 10:00～19:00

年中無休(年末年始を除く)

世田谷パブリックシアター

オンラインチケット

PC <http://setagaya-pt.jp/>携帯 <http://setagaya-pt.jp/m/>

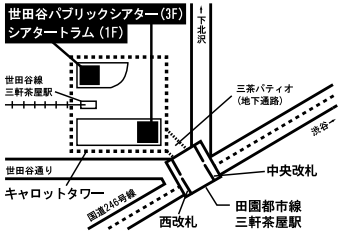
お問い合わせ・アクセス

〒154-0004

世田谷区太子堂4-1-1 キャロットタワー内

Tel. 03-5432-1526

Fax. 03-5432-1559



三軒茶屋駅 直結

[東急田園都市線(渋谷より2駅・5分)・東急世田谷線]

ご協賛・ご協力いただいている
企業・団体

Asahi アサヒビール株式会社

JHI/EIDO

東急電鉄

東邦ホールディングス株式会社

‘TORAY’ 東レ株式会社

TOYOTA
Bloomberg

Anne & Valentin リュネット アン・バレンタイン

INSTITUT
FRANCAIS
FRANCAIS DE JAPON在日フランス大使館／
アンスティチュ・フランセ日本

笹川日仏財団

世田谷パブリックシアター
SETAGAYA PUBLIC THEATRE